

---

# ミール・ストーン番外編

澄空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミール・ストーン番外編

### 【Nコード】

N 8 1 6 4 A

### 【作者名】

澄空

### 【あらすじ】

ミール・ストーン本編の番外編です。テューサとデイルの、一昔前のお話。結構、本編と関係があるような。

## （前書き）

ミール・ストーン本編の番外編です。

テューサとデイルの、一昔前のお話。

結構、本編と関係があるような。

そんな感じになっちゃいました。

関係ある話が、第19部あたりで出てきます。

後々を楽しみにしながら読んで頂けると幸いです

本編の方も、是非読んでみてください。

テューサ篇

- ごめんね、テューサ。ママは行かなくちゃいけないの。あなたの為なの。分かってね。あなたの代わりに……。

7歳の私は飛び起きた。

まだ外は真っ暗闇だった覚えがある。真っ暗で、広すぎる部屋に、大きすぎるベッド。何もかもが私には大きすぎて、寂しい思いをした覚えもある。

あの夢も、あの夜が初めてじゃなかった。何回も、何回も見たことがあった。その度に私は目を覚ましていた。同じところで目を覚ますもんだから、続きを見たことが無い。もしくは無いのかもしれない。あれは多分、幼い頃の、私の、封印された記憶なのかもしれない……。

夢で、母は幼い私の頭を優しく撫でていた。私は、母の言っていることがちんぷんかんぷんで、きょとんとしている。そして、その後すぐに、私は暗闇に包まれ、それに脅え、目を覚ます。

あの頃の私は何に脅えていたのだろうか。暗闇？ 消える母の姿？ それともまた別の理由？ 分からないまま、ここまで時間が流れた。

そして、わかった気がする。私が暗闇を嫌う理由。そういえば、何度もあの夢を見て、怖かった。胸の奥底に封印した。

今は、大丈夫。いつも、傍には仲間がいてくれている。シャネラに、ルビスに、デイル。そして、もうすぐもう1人増える……。ふと、怖くなるときもあるけれど、テュクもいるし。

でも、未だに疑問なのが、1つ……。母はどこへ行つたのだろう。そして、私の父は……？

「テューサ？ どうしたの？ どこか具合でも悪い？」

ぼんやりと、物思いに耽つていた私を氣遣つて、ルビスが声をかけてくれた。その声にひかれて、シャネラとデイルも私の方に注目する。

「どうした？」

「大丈夫ー？ どうしたの、テューサ」

3人の顔を順番に見て、私は笑つてみせた。

「なんでもないよ。みんな、大好き」

今は、みんなが傍にいてくれる。同じ運命を背負つた、仲間が。同じ道を歩んでいる、友達が。

## デイル篇

「もう、大丈夫」

洞窟の中を歩いてきたあたし。好奇心と、あたしを捜す城の兵士たちから逃げるためからだつたわ。歩いていると、先のほうに光が見えてきた。出口だ！ つて思つて。お日さまに当たりたくつて、光の射す方へ走つたの。そしたら、急にあたしの身体が宙に浮いたの！ びっくりしちやつて、ついつい大きな悲鳴が出ちゃった。

「きゃあっ！！」

洞窟の中だったから、余計響いて。あたしの身体を捕まえていたのは、植物の蔓のようなもの。しっかりと縛られちゃって、解こうにも無理。気持ち悪くて、ポルターガイストみたいで、恐怖もあったけど、あたしってばこんな時も好奇心が途切れなかったの。「この先には何があるんだろう」みたいな感じ。

でも、どうにも出来なくて、ついには泣きそうになっちゃった。あたしとしたことが・・・！ そしたら、急に出口から差し込む光を遮られ、今一度視界が真っ暗になったの。真っ暗になってから何秒としないうちに、あたしの身体をきつく縛っていた蔓が解けたわふわってなって、あまりにも急だったから、地面にぶつかるときに受け身が取れないような状態だった。痛みを予想して、目を瞑った。でも、痛みは全然なくて、地面の固さも伝わってこなかった。そおつと目を開けてみると、知らない男の子に抱きかかえられていたの！！

この男の子が出口に立ったから真っ暗になったのねって、胸を撫で下ろしたのも束の間。そのまま男の子はあたしをお姫様抱っこをしたまま、出口から外へ連れ出したの。

久しぶりのたくさんの光が目に入ってきて、思わず目を細めちゃったわ。男の子はあたしを芝生の上へ座らせて、自分はその正面に座った。

よく見てみると、男の子って言っても、あたしと同じくらいかもうちょつと年上の人だった。背が高くて、ジェムよりもかっこよかった。これが、第一印象。

「もう、大丈夫」

あたしがぼーっとしていると、彼は無表情であたしに話しかけてきた。だから、あたしも口を動かしたの。

「あなたは・・・だれ？」

すると、目の前の少年は、あたしに黄色の石を見せてきた。手のひらに乗ったそれを、よく見てみた。

「『平和』の、石・・・？」

ふいに、口から言葉が漏れたわ。でも、彼はあたしの言葉に頷いた。『平和』の石のことは、よく知ってたわ。勉強を教えてください。先生や、大臣から何度も聞かされたもの。「これは真実だ――」とか何とか言っで。

「あたしと、同類の人・・・？」

あたしも、首から提げた『平和』の石を手に持ち、彼に見せるようにして問いかけた。彼は、この言葉にも頷いた。なかなか喋らない人だな、ってこの時思ったわ。でも、友達になりたかった。

「あたし、デイルって言っの。あなた、名前は？」

「ミクヤ・グレイル―」

（後書き）

後々を楽しみにしながら読んで頂けると幸いです  
本編の方も、是非読んでみてください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8164a/>

---

ミール・ストーン番外編

2010年12月10日17時16分発行